

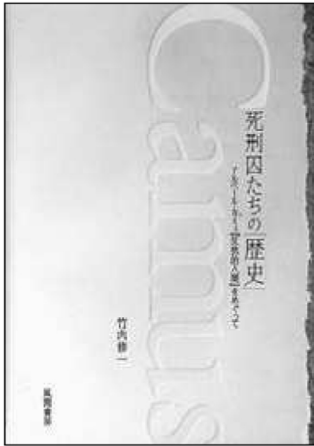
〈セクションⅣ カミュは(反)ヒューマニストか?〉 司会：根木 昭英(獨協大学外国語学部専任講師)

『反抗的人間』に於ける「人間への愛」

竹内 修一

【要旨】

『反抗的人間』(1951)の冒頭で、カミュは彼の時代を特徴付ける「人間への愛によって正当化される虐殺」について語っている。近代史に於けるこの「人間への愛」の系譜をカミュが分析するのは、われわれの考えでは、『ヒューマニズムとテロル』(1947)で哲学者メルロ・ポンティが表明したマルクス主義的ヒューマニズムを批判するためである。本発表では、これまでさして注目されてこなかったと思われるカミュの反ヒューマニズムに光を当ててみたい。



【プロフィール】竹内修一(たけうち・しゅういち)：北海道大学教授。東京大学文学部仏文科卒。同大学院人文社会学系研究科満期退学。博士(文学)。著書に『死刑囚たちの「歴史」—アルベールカミュ『反抗的人間』をめぐる』(風間書房、2011年)、『空間に遊ぶ』(共著、第五章「無限の空間の永遠の沈黙」をまえにして—パスカルからカミュへ)担当、北海道大学出版会、2016年)等。論文に「恩赦と恩寵—カミュに於ける《grace》の問題」、『カミュ研究』第9号、青山社、2010年、『Justice et Meurtre : Polémique sur l'épuration et L'Homme révolté』(『カンヌ研究』第11号、2013)等。